

囲碁あれこれ

大森 海太

初めて囲碁に接したのは新入社員で工場勤務のころ、隣の課長代理のオジサンから教えてもらつた。その後丸の内に転勤した先の事業部長は囲碁大好き人間で、昼休みには応接室でみんなが碁を打つていた。

昭和49年8月のある昼休み、いつものように打つていると、突然遠くでドカンという音がして床が揺れた。地震かと思ったが実は隣接する重工業爆破事件、囲碁のお蔭で危ないところに出くわさなくてラッキーだった。

それからもいろんな人たちと碁を打つて親交を深めたが、思い出に残るのは某氏の紹介で、当時よくテレビにも出演されていた日本棋院の小川誠子七段との対局だ。六子置かせてもひつての指導碁だが、小川さんは素人を持ち上げるのがお上手で、局後の検討では、

「大森さん、とてもよく打てていました。ただこの一手が残念で、正しくひつに打たれていたら、ねたくじ私 投了しようかと思つていましたのよ」

もちろんそんなことはないのだけれど、こう言つて悪い氣はしないものである。のちに三段の某女流棋士と打つたことがあるが、この人は容赦のない人で三十手も打たないうちに我が大石が憤死してジ・エンドとなつてしまつた。

私見だが囲碁のプロとアマチュアの差はきわめて大きい。野球では甲子園で活躍した高校生が、翌年プロの球団で活躍することもあるが、囲碁ではそうはいかない。アマの高段者でもプロの初段には歯が立たないそうだ。

私はなんとなく三段くらいといわれているが、こんなのはゴルフの社内ハンディと同様、好い加減なものである。

会社をリタイアしたあとはアチコチからお誘いがあり、多いときは四つ五つくらいの碁会に入れてもらつて、毎週のように打つていた。

現在では会社の同期とその友人たちの月二回の会のみで、終わつたあとは軽くイッパイ。ペンクラブの前会長T氏も一時所属させていたし、元会長のS氏とは今も好敵手だ。

どのみち年寄り連中のへぼ碁だが、ボケ防止に少しばは貢献するのではと思つてゐる。